【主題】学校運営協議会と地域学校協働活動の一体的推進を目指して

【副題】「かづまっ子応援団」×石巻専修大学と共に創る学校と地域の未来

【学校・団体名】宮城県石巻市立鹿妻小学校
【役職名・氏名】校長　後藤　忠宏

１　主題設定の理由

現在の学校は、児童を取り巻く問題やニーズの多様化・複雑化など様々な教育課題に直面している。このような中、平成１８年の教育基本法改正では、第１３条に「学校、家庭及び地域住民の相互の連携協力」が新たに規定された。また、現行学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実現が学校教育の基本理念として示され、学校と地域が目標やビジョンを共有し教育活動を展開することが求められている。これらのことからも地域との連携・協働はこれからの学校経営を支える重要な視点であることは言うまでもない。

本校の位置する地域は、東日本大震災によって多くの住宅が全半壊するなど甚大な被害を受けた地域である。震災後には、一時的に居住地を変えざるを得なかった家庭も少なくなく、従来築かれてきた地域コミュニティや住民同士のつながりが希薄化するという課題を抱えている。

このような地域の実情があるからこそ、本校では学校運営協議会と地域学校協働活動を一体的に推進し、「地域と共にある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」の実現を目指している。このような取組は、地域の教育力を学校教育に生かすだけでなく、震災後に希薄化した地域の絆を再構築し、地域住民が学校を支え、学校が地域を支えるという相互の関係を育むことにもつながる。また、何よりも、地域の人的・物的資源を教育活動に生かすことにより、児童の豊かな学びや郷土への愛着を育むことが期待できる。以上のことから、本研究では、学校運営協議会と地域学校協働活動の一体的推進の実践について検証することとした。

２　研究のねらい

本校では、学校運営協議会を中心として地域との協働体制を整備し、地域学校協働活動を通して地域の人的・物的資源を教育活動へ積極的に取り入れてきた。

本研究では、学校運営協議会と地域学校協働活動の一体的推進を通して、「地域と共にある学校づくり」が学校と地域の協働関係を構築し、それが児童の豊かな学びや地域とのつながりをどのように創出しているのかを明らかにすることをねらいとする。

３　手立て・理論

（１）地域に開かれた教育課程について

次期学習指導要領に向けた検討において、文部科学省中央教育審議会教育課程部会（令和７年９月）は、「社会に開かれた教育課程」と「個人と社会のウェルビーイングの実現」がこれからの学校教育の基本的理念であることを示している。学校教育の未来を切り開く中心的存在である教職員、学びの当事者である児童はもとより、学校を支える主体である保護者や地域住民も含めて、その実現を支えることの重要性が示されている。本校では、このような理念に基づいて地域の教育力を積極的に教育課程へ取り入れる協働教育を推進している。

（２）学校運営協議会と地域学校協働活動について

本校は令和５年４月に学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を設置した。その設置要綱には、「学校と保護者及び地域住民等との間の信頼関係を深め、学校運営の改善や児童生徒への健全育成に取り組む」と明記されている。この「信頼関係」の構築こそが、学校と地域の連携における理論的基礎である。

学校運営協議会は、学校運営の基本方針を承認するとともに、学校と地域が教育目標や学校課題を共有し、今後の方向性を協議する意思決定の場として機能している。一方、地域学校協働活動は、その目標を実現するために地域住民や関係団体が主体となって教育活動を支える実践の場である。

本校は、この両者を一体的に機能させることにより、「地域全体で児童を育てる環境づくり」を推進するとともに、地域の教育力の向上や活性化につなげている。

本校の地域学校協働活動組織である「かづまっ子応援団」は、その実践の中核を担う組織として、地域住民が主体的に教育活動へ参画し、学校と地域が相互に支え合う関係づくりを推進している。単なる学校支援にとどまらず、地域住民が教育課程の実現に主体的に

関わることで、児童の学びを充実させるとともに、地域の教育力の向上や地域コミュニティの再生にも寄与することを目指している。

## ４　実践

### ４．１　「かづまっ子応援団」の概要

「かづまっ子応援団」は、令和６年度から本格的に始動している地域住民による学校支援ボランティア団体である。令和８年７月現在、約４０名が登録しており、各学年や担当教員の要望に応じて、学習や学校行事を支援している。

また、「かづまっ子応援団」の一員として、本校の近くに立地する「石巻専修大学」とも新たな形の地域学校協働活動を展開している。大学職員が本校学校運営協議会委員として学校運営に参画するとともに、大学研究者による専門的指導や、大学生による放課後の居場所づくりなど、多面的な取組を進めている。

### ４．２　学校支援地域コーディネーターの役割

「かづまっ子応援団」と学校側をつなぐ役割として必要不可欠な存在が「学校支援地域コーディネーター」である。コーディネーターは本校のすべての職員と面識があり、各学年や担当の教員と日常的に情報交換を行っている。その中で活動に対する学校側のねらいや思いを十分に理解したうえで適切な人材を選定し、連絡・調整を行っている。このように、学校の教育ニーズと地域の人的資源を効果的にマッチングさせることで、地域学校協働活動が円滑に推進され、その成果が児童の学びの充実と質の高い教育活動の実現につながっている。

### ４．３　具体的な活動事例

（１）「かづまっ子応援団」との連携を通じた活動

①地域の伝統行事を通じた文化学習

本地域では、獅子振りなどの伝統行事が長年にわたり受け継がれてきたが、高齢化に伴う担い手不足により、その継承が課題となっている。学校運営協議会での熟議を通してこの課題が共有され、学校では地域課題の解決にもつながる取組として、児童が地域の歴史や伝統行事を学ぶ活動を教育課程に位置付けた。

「かづまっ子応援団」の方に定期的に来校いただき、獅子振りの演舞や太鼓の演奏方法について指導を受けた。児童は地域の伝統文化や歴史への理解を深めるとともに、その成果を学習発表会で地域の方々や保護者に披露した。

【▲地域の方から太鼓演奏を学び、発表会で披露する様子】

②クラブ活動を通じた児童と地域の関係構築

本校のクラブ活動の一つである「農村クラブ」では、活動に取り組む際、「かづまっ子応援団」の方に定期的に来校いただき、梅ジュースや農作物の育て方、昔遊びなどを教えていただいている。

継続的な交流を通して、児童が地域の方を身近な存在として感じるようになり、地域の大人との顔が見える関係づくりにつながっている。また、地域の方からは、自らの経験や技能を生かす機会となり、生きがいや充実感につながっているとの声も聞かれている。

【▲地域の方の指導のもと、梅ジュースを作る様子】

③家庭科における地域の方による学習支援について

５・６年生の家庭科では、裁縫やミシン操作などの学習に「かづまっ子応援団」の方が参加し、学習支援を行っている。これらの活動は、教職員だけでは、十分に支援が行き届きにくいが、「かづまっ子応援団」の協力により、児童はきめ細かな支援を受けながら技能を習得し、学習の充実につながっている。

【▲地域の方の指導のもと、ミシン操作の活動を行う様子】

④校外学習における安全確保について

学校教育では児童の安全確保が最優先であり、校外学習では特に十分な見守り体制が求められる。

本校４年生の総合的な学習の時間では、地区ごとにグループを編成し、防災マップを作る学習に取り組んでいる。地域での実地調査の際には、「かづまっ子応援団」の方にも各グループに同行していただくことで、安全を確保するとともに、地域住民の視点からの危険

箇所等について話を聞くなど体験的な学習を進めることができた。

【▲地域の方の見守りのもと、実地調査を行う様子】

⑤委員会活動を通じた学校の環境整備について

環境委員会では、「かづまっ子応援団」の方と協働して花壇への植栽活動を行っている。児童と地域の方が協働することで、広い花壇を効率よく整備できるだけでなく、教職員の負担軽減にもつながっている。また、児童にとっても地域の方と協力しながら学校環境を整える貴重な学びの機会となっている。

【▲地域の方と協働で花壇の整備を行う様子】

（2）石巻専修大学との連携を通じた活動

①防災学習への大学の専門的知見の活用

本校は東日本大震災の被災地にある。このような地域だからこそ、児童が防災について深く学び、実践的な知識を身に付けることは極めて重要な課題である。

そこで本校では、石巻専修大学と連携し、専門的知見を生かした防災学習を実施しているが、中でも６年生を対象に、「人流」をテーマとした授業を実施した。「人流」とは、スマートフォンの位置情報から人の動きを可視化したもので、２０２５年７月のカムチャツカ半島地震に伴う津波警報発令時の人流データをもとに、自分たち、また地域住民が取るべき避難行動について考察する学習を行った。

大学准教授による授業を通して、児童は防災をより自分たちにとって身近な課題として捉え、科学的な視点から災害に備える意識を高めることができた。

【▲大学の准教授と防災学習に取り組む様子】

②大学との連携によるフィールドワーク

本校では、５年生が総合的な学習の時間に地域の自然について探究的な学習を行っている。その学習を深めるため、石巻専修大学に協力いただき、地元の渡波海岸で生き物調査を実施した。

調査では、大学の研究者や大学生７名から生き物の名前や特徴、生態系について専門的な説明を受けながら観察を進めた。児童はその場で疑問を解決し、多面的な視点から地域の自然を学ぶことができ、教室だけでは得られない体験的で深い学びにつながった。

【▲大学の研究者や大学生と生き物調査を行う様子】

③放課後の居場所づくり「かづまスポーツ広場」

令和７年１２月にこども家庭庁から「放課後児童対策パッケージ」が示されている。その中に、「放課後のこどもの豊かな時間、安全・安心な居場所を確保することは、次代を担う人材を育成する観点及び共働き家庭等が直面する「小１の壁」を打破する観点から喫緊の課題である」との文言がある。このことからも放課後に、児童が安心して過ごすことのできる場を設けることが必要である。

児童が放課後に安心して過ごせる居場所を確保することは、学校や地域にとって重要な課題である。一方で、教職員が放課後の活動を担うことは負担の増加につながることも考えられる。

そこで本校では、石巻専修大学と連携し、教職を志望する学生が定期的に来校して児童とスポーツを楽しむ「かづまスポーツ広場」を開設している。児童にとっては安全・安心な放課後の居場所となるとともに、学生にとっても子どもとの関わりを通して実践的に子どもとの接し方を学ぶ機会となっている。学校・大学・地域がそれぞれの強みを生かした協働の取組となっている。

【▲大学生と一緒にスポーツに取り組む様子】

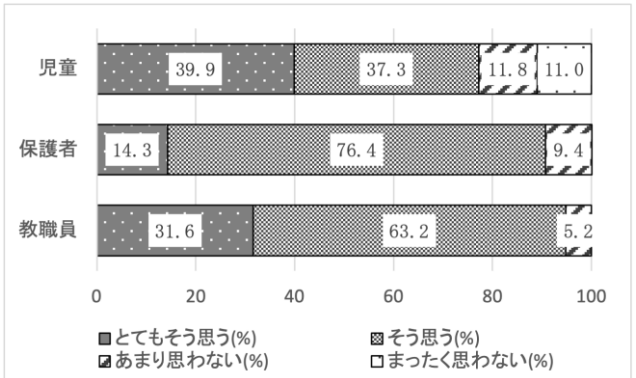
## ５　本実践における成果と課題

【成果】

本研究における実践を通して、学校運営協議会を基盤とした「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた組織的な取組を推進することができた。

令和７年度に実施したアンケートでは、「学校は家庭や地域と連携した教育活動を行っている」という項目について以下のような結果となった。

Q：学校は、家庭や地域と連携した教育活動を行っているか。




（出典:令和７年度学校評価アンケートより）

この結果によれば、保護者・教職員ともに９割以上が肯定的な評価をしており、家庭や地域と連携した教育活動が学校全体に浸透していることが分かる。

これは、学校支援地域コーディネーターを中心に、各学年や担当教員のニーズに応じて「かづまっ子応援団」との協働を進め、学習指導、クラブ活動、防災学習、校外学習の安全管理など、多様な場面で地域の方と関わる機会を創出した成果であると考える。

特に学校運営協議会での熟議をきっかけに実現した獅子振りの活動は、地域文化の継承につながる取組として、保護者や地域からも高い評価を得た。また、児童にとっても、地域の歴史や文化を理解し地域の一員としての自覚を育むとともに、郷土への愛着や誇りをもつ大変貴重な学びとなった。

さらに、石巻専修大学の専門的知見を活用した学習や大学生との交流など連携を継続的に進めることは、地域全体の教育力向上につながる取組へ発展している。

【課題】

本研究を通して浮き彫りとなった課題は大きく二つある。

一つ目は、児童自身が家庭や地域との連携を十分に実感できていない点である。学校評価アンケートでは、２２．８％が肯定的な評価をしなかった。登下校の見守りや環境整備など、地域の方々の支援が児童にとっては見えにくい活動となることもあるため、今後は地域の支援が児童たちの学びや生活を支えていることを実感できる機会を意図的に設けていく必要がある。

二つ目は、「地域の子どもをどのように育てていきたいか」という理念を、より多くの教職員・保護者・地域住民と共有していくことである。現在の地域学校協働活動は、関係する教職員や学校支援地域コーディネーター、地域の方々の尽力によって支えられているが、教職員の異動や地域住民の高齢化により、活動の継続が難しくなる可能性も十分に考えられる。

今後も、学校運営協議会や「かづまっ子応援団」を中心に、活動の意義や成果を共有するとともに、持続可能な協働体制と人材確保の仕組みを構築していくこと、そして、学習指導要領や学校教育目標との関連を明確にし、一過性の単発的な活動にならないよう教育課程に位置付けていくことなどが重要であると考える。

## ６　終わりに

本研究では、本校の地域学校協働活動の実践を通じて、学校と地域の相互関係が児童の学びにどのような影響を与えるのかについて考察してきた。

学校が抱える多様な課題に対応するためには、学校と地域が「共に子どもを育てるパートナー」として協働し、教育を創造していくことが求められている。本校の取組はまさに、「社会に開かれた教育課程」の理念を実現する実践である。

「かづまっ子応援団」による地域文化の継承、学習支援、安全確保、環境整備、さらには石巻専修大学との専門的な学びや放課後の居場所づくりなどの協働活動を通して児童は地域との絆を深め、そのつながりの中で豊かな学びを得ることができた。今後も引き続き、本校及び地域の実態や特色に即した、そして、地域住民や大学生にとっても、生きがいややりがいを感じながら子どもの成長に関わる意義ある機会となるよう、この実践を更に力強く推進していきたい。

【参考文献】

・学校と地域でつくる学びの未来
「https://manabi-mirai.mext.go.jp/index.html」
・文部科学省(2026)
『教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)』

（執筆責任者　直江　一平）